The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アール・デコの陶芸における工芸とデザインの問題
Author(s)	佐野, 敬彦
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53171
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アール・デコの陶芸における工芸とデザインの問題

佐野敬彦

アール・デコは工芸とデザインの両面にまたがっており，この二つの間の問題，あるいはアートとの関連といった問題を考える上で興味ある対象である。今回はそのうちから陶芸を取り上げて分析した。

まず1920年代，30年代の陶芸全般をみると，二つのジャンルに分けられる。(1)陶芸作家の作品，(2)画家・彫刻家などの作品，(3)量産，あるいは少数シリーズの工場規模の製品である。このうち，陶芸家の場合ではバーナード・リーチ，フランスのドゥケールやルノーブルなどに見られるように日本の民芸に啓発されるところが大きく，時代の精神を把握しているとはいいがたい。また，美術家たちはこの時代では手すさびといったもので，土と格闘しているわけではなく，これも除外される。したがって(3)の大小の陶磁器工場のものが分析の対象となるのだが，このなかでも，大工場のものは18世紀，19世紀の伝統的なデザインをまもることが多く，冒険になかなか踏みこめなかった。むしろ，小工場の製品や大工場でも主力でない，実験的なものに時代の造形精神をもったすぐれた作品がみられたのであった。

それを，イギリス，フランス，イタリア，アメリカ，ロシア，ドイツの陶芸の順に分析したが，残念ながらその詳細（それが発表の重要な点であるが）は紙数の都合から割愛するとして，結論的に述べたことは次のようなものである。

アール・デコの陶芸の生き生きした創造性は工業的な生産プロセスと工芸的な手づくりと斬新なデザインの総合のうえに成立していることである。陶磁器の器胎は例外はあるものの，中心となったのは石膏型を用いた「型おこし」あるいは「型ながし」（鋳込み）というもので，機械的な量産，つまり工業的であった。一方，絵付けは手によるものが圧倒的に多く，これは手工的である。量産方式の転写法ではない。このやりかたの代表的なものはイギリスのクラリス・クリフやスージー・パーカー，イタリアのジオ・ポンティ，アメリカで売られた日本のノリタケ製のアール・デコの磁器製品，ロシアの革命前後の陶磁などである。また，手描きではないが，スプレーを用いた手法があった。これはコンプレッサーによるスプレーで絵付けするもので，型紙をあてて形をとる，いわば「吹き墨」の手法である。その型は片側に用いて他方にはあてずにスプレーして片ぼかしにすることがおおいもので，抽象文様を幻想的に表したものが，ドイツのブンツラウ（今日ではポーランド領）をはじめドイツ各地でおこなわれて傑作をつくった。これも手で行なうもので，一点一点少しづつちがうものだから手工品といえる。工業と工芸の協力しあったものであった。そこから出てくる暖か味，おもしろさがアール・デコの陶芸美をつくっている要因の一つである。

そのデザインをみると，そこには二つの傾向がみられる。具象的なものを単純化，装飾化したものと，もう一つ，幾何学的な

抽象文様がある。前者はクラリス・クリフやジオ・ポンティやノリタケ製アール・デコが典型的で，奔放，奇想，洒落，幻想に富んだ近代装飾派とでいうべきものである。私はこれを前期アール・デコ文様と呼びたい。抽象文様はロシアのカンディンスキーやスエティン，フランスのラルマン，またスージー・パーカー，ドイツのスプレー技法のものなどモダン・デザインにむかったものなどで，ロシアを除くと1920年代末から30年代初めにかけて多いので，後期アール・デコ文様と呼ぶことができる。近代的な清澄で気品のあるものが少なくない。

工業デザイン的なものと工芸的なものとが融合しているところにアール・デコがあったわけだが，それはポストモダンにおいて，工業と工芸の総合をめざしたことのなかに再びあらわれてきたものでもあった。ポストモダンがデザインに，工芸のもつファジーな感覚生かそうとしたときに装飾の復権がなされたのだった。ポスト・ポストモダンの今日，なお日常用の工業製品，特にテーブルウェアーなどには工芸的なファジー性を考える必要があるかもしれない。アール・デコの陶芸はアートではなく，実用品であり，決して高価なものではなかった。それでこそ時代の造形感覚をもっとも素直に表現していたこと，工業と工芸の融合した人間のための造形をつくりだしていたことを忘れることはできない。

さの・たかひこ　京都市立芸術大学
1991. 11　第33回大会